

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370899

研究課題名(和文)古墳時代～奈良時代の西日本集落遺跡における倉庫遺構に関する研究

研究課題名(英文)A study on granary structures from 5th to 8th centuries in Western Japan

研究代表者

重藤 輝行 (Shigefuji, Teruyuki)

佐賀大学・芸術地域デザイン学部・教授

研究者番号：50509792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：5～8世紀の西日本の集落遺跡の高床倉庫の検討により、単位集団ごとの倉庫の所有、管理および首長・豪族居館の倉に示される私富の蓄積が進展すること、その一方で群倉とも呼ぶべき集落全体で所有、管理される倉庫群が継続して存在することを示した。高床倉庫の所有と管理が、この時期の社会関係とその変化を解明する上で、重要な資料のひとつであると認識することができた。各種の史料に登場する倉も、そのような様相と対応するものであろう。また、5世紀以降の倉庫は建築構造、穀物貯蔵システムなど様々な面で、朝鮮半島南部の影響を受けていることを論じた。

研究成果の概要(英文)：In this research program, I studied granary structures from 5th to 8th centuries in Western Japan. On results of this research, granary structures were important component of settlements. Their management by families and lineage indicate that cultivation and consumption of rice were depend on families and lineage structure. Their management and the families and lineage structure were similar to Korean Peninsula.

研究分野：考古学

キーワード：倉庫 高床倉庫 集落遺跡 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 西日本

1. 研究開始当初の背景

一般的には建物や諸施設で構成される原始、古代の集落の景観は社会関係を反映すると考えられる。景観を構成する建物、施設の中でも生産物の貯蔵に係わる貯蔵穴や高床倉庫などの倉庫遺構は原始・古代集落の研究史上も、竪穴住居などの居住用建物について、重要視され、倉庫の有無や集落ないしはそれを構成する小集団(単位集団、竪穴小群などと呼ばれる)への帰属関係から、集落遺跡から社会構成の議論が進められてきた。しかし、近年では、集落遺跡の内的関係に基づいた社会関係に関する議論が減少しているのが現状である。

一方、1980年代以降、官衙遺跡の倉庫遺構に対する調査が大きく進展し、奈良時代の「正税帳」に記載される郡衙等の正倉の記録と遺構との対比が行われている。また、大阪府法円坂遺跡、和歌山県鳴滝遺跡等の5世紀の大型倉庫群も発見され、倉庫遺構・建築構造自体の分類、編年に関する研究も深まっている(植木1991)。これらの研究成果と対応するような集落遺跡の倉庫の解明が、集落遺跡研究の大きな課題となっている。

5～8世紀の倉庫遺構は、総柱掘立柱建物形式の高床建物(以下、「総柱高床倉庫」とする)の構造に統一が進み、各地で調査事例が蓄積されている。その中には、群集したり、規則的に並ぶような配置を呈したり、竪穴住居および側柱掘立柱建物との主軸方向の一致などから、同時的な建物景観を復元できる例も多い。

そこで、本研究では5～8世紀の西日本における倉庫遺構の構造・形態の変化、集落およびそれを構成する小集団の倉庫の所有・管理形態の変化を検討して、その実態を解明するとともに、集落研究からの社会構成の復元へと研究を進める突破口を見出すこととした。

2. 研究の目的

5～8世紀の西日本における集落遺跡の総柱高床倉庫を対象として取り上げる。総柱建物自体は弥生時代から存在するが、倉庫として普及が進むのは5世紀以降のことである。また、9世紀になると稲穀の収納方法に変化が生じ、総柱高床倉庫は一般集落、官衙等から消滅していったとされる。これまでの研究との関連性に加え、このような総柱高床倉庫の歴史性を重視して対象時期を決定した。

本研究ではこれまでの研究の検証・充実を図ることが第1の目的である。そこで、近畿、山陽、山陰、四国、九州北部、九州南部等の地域の集落遺跡の倉庫例を収集し、形態・構造、規模をデータベース等で整理し、時間的変化、地域性を検討する。また、必要に応じて、良好な官衙正倉、豪族居館の倉庫群を検討に含める。なお4世紀以前は、1×2間、1×1間の高床倉庫が一般的であり、総柱高床倉庫自体も、5～6世紀には側柱を通し柱

とする「束柱・通し柱構造」が多く、7～8世紀には全ての柱で高床を支え屋根荷重は壁体で受ける「総床束構造」が多い。このような総柱高床倉庫に先行する倉庫との関係、総柱高床倉庫自体の構造変化にも注意を払うこととした。

この時期の総柱高床倉庫は集落全体に伴う場合、集落の小集団に伴う場合、首長・豪族居館に伴う場合などがあるが、いずれにおいても数棟が群集する事例も多い。その中には、規格や柱筋・主軸方向が一致したり、間隔が建物の柱間の整数倍となるなど、同時性を示す例も少なくない。そこで、建物配置のパターンと同時関係の抽出基準を整理し、同時存在する棟数とその階層性との関連についても検討する。なお、総柱高床倉庫については建物規模から、穎稻を収納した場合の、扶養可能人数を算出する方法が提示されている。良好な事例ではその検討も試みる。

研究では5～8世紀の集落遺跡における総柱高床倉庫の変遷、地域性を見出し、あわせて集落内の建物配置や倉庫の棟数の階層性から集落およびそれを構成する小集団の倉庫の所有・管理形態を考慮した集落類型、変化のモデルを提示することが最終的なまとめとなる。集落類型の設定、変化のモデル構築には古墳～奈良時代の集落研究(都出1989など)や戸籍・計帳にもとづいた奈良時代の社会構造に関する研究との対比を図りたい。それにより古墳時代～奈良時代の集落景観、社会関係を研究する際の倉庫遺構の占める重要性を明らかにする。

3. 研究の方法

西日本における5～8世紀の良好な総柱高床倉庫等の倉庫棟を含む集落遺跡の発掘調査報告書、研究論文等文献を収集し、その形態・構造、規模のデータを作成する。これらのデータについてグラフおよび表等を作成して、分析し、変化や地域性の傾向を把握する。

また、集落遺跡内の同時存在する倉庫の棟数、集落内の小集団への帰属関係等を分析し、集落全体に伴う場合、集落の小集団に伴う場合、首長・豪族居館に伴う場合を考慮しながら、倉庫棟の配置、同時存在する棟数などの特徴を抽出する。それにより、古墳～奈良時代の集落や朝鮮半島南部の三国時代集落に関する研究や戸籍・計帳にもとづいた奈良時代の社会構造に関する研究と対比しながら、集落の類型化、変化のモデル構築を行い、その歴史的な意義付けを論ずる。

4. 研究成果

(1) 研究の主たる成果

5～8世紀の西日本の集落遺跡の高床倉庫の検討により、単位集団ごとの倉庫の所有、管理および首長・豪族居館の倉庫に示される私富の蓄積が進展すること、その一方で群倉とも呼ぶべき集落全体で所有、管理される倉庫

群が継続して存在することを示した。高床倉庫の所有と管理が、この時期の社会関係とその変化を解明する上で、重要な資料のひとつであると認識することができた。各種の史料に登場する倉も、そのような様相と対応するものである。

また、5世紀以降の倉庫は建築構造、穀物貯蔵システムなど様々な面で、朝鮮半島南部の影響をうけていることを論じた。5世紀以降の総柱構造の高床倉庫は、その時期に新たに朝鮮半島から導入されたものと言える。あわせて、倉庫遺構に注目した朝鮮半島南部と日本の集落遺跡の比較の意義も示せたのではないかと思う。

筆者は集落遺跡の研究とともに九州北部を中心に古墳の研究、土師器や朝鮮半島系土器の研究を行ってきた。ここでの倉庫遺構の研究を通じて、古墳とは異なる資料から、古墳時代～古代の社会を考える機会ともなり、個人的には有意義であった。また、古墳や土器にうかがえる朝鮮半島との関係に着目してきたが、それを高床倉庫の面から補強できたと考えている。

(2) 方法論的な成果と課題

集落遺跡では建物群の同時性の証明が困難であり、現在の集落遺跡研究では集落内の単位集団、集落共有の倉庫などの分析よりも集落間のネットワークに注目した議論に重点が移っている。しかし、高床倉庫の検討によって、単位集団の自律性や集落共有の倉庫の存在を明らかにすることができた。単位集団の動態や共有の倉庫からうかがわれる集落の共同体的側面について、倉を考慮することで、より具体的に描き出せると思われる。

高床倉庫は貯蔵という機能は明らかであり、そこに収納された物資は多様であるが、生業、環境、集落の性格、史料や植物遺存体によって、ある程度、収納物を推測することができる。また、配置などから同時性を証明できたり、扶養可能人数の検討から人口の推定を行うことも可能である。これらを検討すれば、5～8世紀に限らず、弥生時代以降の考古学的な集落遺跡の研究、集落内の社会関係の解明もさらに進めることができるという見通しが得られた。

ただ、高床倉庫の遺構については、本研究では建物の設計・配置企画や柱間距離・尺度などの分析を行うことができなかった。今後、研究を深めるためには、これらの厳密な分析が不可欠であるし、良好な事例に恵まれれば現地で検討する機会を得たいと思う。また、上部構造についてはさらに建築史の観点を加えた検討も必要である。このような倉庫の分析、検討のためには、現場で柱痕を捉えながら建物を抽出、記録し、時期を決定するための調査法、さらには柱痕の位置を基準にした建物の規模、尺度などの分析法の充実を図るべきであろう。

(3) 今後の展望

本研究では主に西日本の5～8世紀の高床倉庫と考えられる総柱建物に注目して検討を行い、それを通じて倉庫遺構から集落遺跡を見る視点の重要性を確認することができた。ただ、今回の検討は九州北部、中四国、近畿に留まるので、今後は東日本の5～8世紀の倉庫遺構を検討する必要がある。

また、九州南部については資料整理の関係で十分に論ずることができなかった。東日本や九州南部には水田稲作に適さない地域もあるので、各地の栽培作物にも考慮しながら、今後も資料収集、検討を進めていきたい。

一方、朝鮮半島においては、一部の事例を取り上げたに過ぎず、体系的な検討を行うことができなかった。韓国では三国時代の大規模な集落遺跡の調査が多く、統一新羅時代の集落遺跡の調査例も増加している。三国時代の総柱建物は日本の5世紀以降の高床倉庫の起源と考えられるとともに、倉の管理、運用のシステムにおいても両地域の関係が推測される。日本古代の倉庫に関する問題の核心部分は、朝鮮半島南部の遺跡の検討なしには十分な解明が進まないと言える。今後、より体系的な朝鮮半島南部の集落遺跡、その倉庫の検討を行っていきたいと思っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

重藤輝行『西海道のヤケと倉』『太宰府市席発掘調査50周年記念論文集 太宰府の研究』投稿中、2018年10月出版予定

〔学会発表〕(計1件)

重藤輝行『古墳時代～奈良時代の集落遺跡における倉庫遺構』平成27年度九州史学会考古学部会、2017年12月13日、九州大学

〔図書〕(計1件)

重藤輝行『古墳時代～奈良時代の西日本集落遺跡における倉庫遺構に関する研究』平成26～29年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 刊行：佐賀大学芸術地域デザイン学部、2018年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

無し

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

無し

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kodaisonrakushakai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

重藤 輝行 (SHIGEFUJI, Teruyuki)

佐賀大学 芸術地域デザイン学部 教授

研究者番号: 50509792

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()